源氏物語の抄本
へ 13
1308
2

本清

門へ 13
號 1308
巻 2.

清家の俤の草庵の月
むるに塵可なし洋服の栄耀を
さふ様して大名屋敷
種を植かれ
倘公家たらば都
らば平相国唐人
然ども人を

をのぶて樂をを極めもてふかの歌人
の識名などの印度の廿を極樂して
樂み極むる所と都の傷佛門の濁り
似るとなくどるみけ蔵る林の道に家く
まぬ雲月の月はなん深く古の
果敢なき仮宮しも勧懲の言を
常に存して若恩邪心月花を備ふ者

宮称樂遊宴の美人の仮粧を見
ありて可也

人つくる形の陰ぶつる仮粧を
もりまむ花の素さへ
ぬぐめ

独著堂主人の誌

一勝齋
於憍
於耶
於好
於蓮

大多屋
歡樂
菊園
道覺
丈右エ門

さくらつゝみ
いつ
稚
うぐいす
今さかり
白人
さくら葉の花
独着
堂図
兵樂
一陽齋

雪廼嵯峨廼假寐巻之四

耶林

東都　松亭金水　編次

第七回

人の胎内ハ宿るとゝ。一滴の水ありとらんども。則魂あるが故ハ。その水凝て妄ハ流ざ。成ざ。

もし言偽名偽美人。成ひ。看通ありざる人。あるひい父母の枕ハ。ち。奇陽を。ゆ。せ。め。係が鞋を。因く。備ど美ハ又ハ。せて。然して。ふるさ書ハ中

数度見えて。時々しきるに見給ひ。佛者に
あり。古今猶多の名物雪士。まさに傷学の徒に
かりしを。あとさぐに。只名僧知識の。宿る所なり
父母に。割るゆまに祝ひ。さぞおかに耶麻い筆彷彿。勅
先のことく父母許。のおかあるに和歌の。水のうさぐと契り
ぐ。修行にあるに此とありしうに。疏にこの指めにいぐと
く。まの何とあく客にて。そのうち殺児とも出来さるう。
その時こを定めんと。あるにうてお耶麻ちうに。脇字

うりしにあるうぐどもに。まぐ三月に日長ざるべ。猥しにあるに
然あぐう。倘実のことあるべ氏者を以て本妻と。定め
らまんう然もありてい。柳のお情へ何とあう。民蹟の主
ぎるに地せり。若柳の者にのやうに。儀行あるべ僥
倖ぞ。客子を見だあと云へども。西と東と隔てて。朋
義一床に居ぐざるべ。客男客子も知てがてく。一人
業にて今日とうぐ。型とくてその時より。一周候
をうけまべ。悪阻病さ代に。大さく癒て後も。腰

ようふあるとけまべ。それや誰ガコンても懐抵と。素さるおろり
ふありけまど。お情いおく仕来して。何時ふかそろね容のみ
あまど。そのみ〜〜〜丈ふいそぐど。お耶麻ハ柿のおまろも。
恥りけまべおいそを。丈ふつけても柿お情ガ。いぐと落ね
間ふべきをいそねいふふ一枚の。ありとーつえてお耶麻ガ
外ゆ。気の毒さも一倍し。いぐいせんとおりの通り。不図
入来る筆彷ガ。障子を開て抜つき出。何時ふかそろ
ね元気然さ。まづヲまゝとうち笑ひ「お耶麻さあ出撥

撥ようう。頃ろ〜〜ろ波あゞと〜〜。存まして共変障あり。
初の初と開ろ〜〜〜て大きふ出を沙法をいてまゝと「ヲヤ
よゝお歩ど。ふ三例い元気で義しい私ア。我て今日出
て お出ろ「ハイ今初も連く赤ッて何拍まうと存まし
ふっ延さと稽〜〜形麿ガ逆入て。翌日ごろうどろあまと
ろ〜。ふひ切て出て来りまゝとトのひて お耶麻の傍ふまろ
又神の陰へ傍あろ〜「薮ろ〜〜〜稀と稽〜〜でぶひまん。
撥お下地ぢやアありませんろ「ヲまゝ何拍ろさうらいがお

何処へお吹どエ「ナアニ」先刻ゝゝお婦さんの方へ来つて。
例のお喧しをいつて来ありまゝさぐ。お婦さんのおつしやる
事。何程ゝ言ふきけば。お耶麻い姓振ふあつさいゝ
ゝ。吾倆が教田清て申ても。何とおつしやつても
嗽も出さあいゝ。吾倆の方でも云て居るけど
ど。左程で先此中い。右左程毒が悪くとつて。孫ゝ
紀ゝ。そのとふ。何ざう時ゝ居ゝとの。唖吐とも
云てゝきうどがそうとも。ア大ゝ悪阻ゝ。いゝものどうう

とゝ。此此ゝゝ動づいゝ。ゝゝ被攘が自己の身で。知ゝ
あいゝ。ゝもあるまいが。何故吾倆ふ新さあいゝとお云ふ
ゝゝゝ。ゝゝ丈い孫ふお婦ゝゝい然ゝあがゝまぐ嗤。お
早うどさいまんゝとゝゝ。吾程サいゝゝとゝ云ゝ斗
ゝ。他ふ何とも在保。まもんのふ。私ふ何ゝゝ主弥と。
変ふ考ゝ攘ふいゝと思しゝ云て。その四変を意でゝゝ
ゝせうが。マア何ふゝゝ何時まで。新ゝん報で入ン
ゝゝゝ。ゝゝ。吾程主弥が宅

ごぜのまうし「吾輩も左様おかゝへけるとは。しかし中
おあも左様からひどう。若殿様出来さまう。
その葬式のうち抱きうと。いつへもちやアあつらうふ。
然〳〵て入るゝと婦を措て。吾輩が本妻ふあつたの
そうふ。せへ〻そううと。こゝへうさ「いつさまこの四畳
亮も一通りといつまアは者の。そうふも喫えませんけまど。
聲にば左様あり〳〵さつて。そうやアぐちやアござい
ませんう。全弁隙まりかゝ気が弱いうう。隙まうふい
ちゆまで法や者とお考へ抱むんのが却て悪い。こを抱ふ
い見抱さまの。そうたふもごぎひませうう〳〵。まゝは親家の
見抱さまの。そうたもあうとませうう。そう壊い世のお様
ひあさうぞ。他さまの子作をりふ。抱むそが宅ござい
まさて。別してお子抱あんどがかばくや。脱づくて。出来る
ものぢやアございませぞ。のそうで弁俳の授とのの左様
そうてアうまばお婦さんざつて。何抱も詮方はありません
子トお耶麻が気性をそる左ふ。励まんどくいひ論

おやま
あけら

文ちう
ちゞ猫
お情ゥ
子舎ホ
お耶麻ゥ
脇ゆくると
かる

せゝ。お耶麻い妻時考へく。春こうしが新をあげ
丈あこう名ひ切て左相いひ申せう子。我〳〵てまく爺さん
の方へ申。左相云てあげ ごゝいあるまい。お何時お頂り
ぢう。貴下さこう云て貴〳〵こう「モウ三月ゐ申おゐり 拵
ぐんあこう。丈〳〵へ仏作あいと為うごゝいませう。そ
つゆア私がお親里の方へ行てもよいけまどゝまゝ
俵爰鳥吉ぐんを。お遣あさるバ宜ごゝいませう。我〳〵
て者 こう申お文で為ゝ〳〵仏作あいと。定めてお

業ド あこういませう「ホンニ左相ごらう子。女ゝ一生の大
役ごといふこう「ゝ拵ホ丈此まうけのい為い
けまど。丈ごこうお拵。仏拵のこの女中い。推源ホ為い
人月が重あると。他ホ丈せく為いのい。貪婪持こう
引裂こう。磨へ石遠が為て申貴下ホ。仏の残らのい
ゆうホ。いこう〳〵て色と中まゝ。私ホンゼ申為い時。二爰斗
つゆいこうとが。雪処い私の為さこう。世申持ゝ者ます
こけまど。四方他で者い程く。穏婆さん申石ホ合

あいてのこと。あくしゝ子ホ縁があるいうして。二個とも死亡まし
て。丈ゝいまでホ ございません。勿論今い癌婦言語
ホもがあらゝ日ホやアい業晒しでございまうた「ホンニ」
おあも一個あると楽しゝ子「楽しゝこざろ昔しゝざろ。
知まゝものぢやアございまうせんト先より他の影しホ
あらて。ちやや業晒ホもあうけまで。侍女どもが持出を
夜食。華燭もを処で張一丈あゝ今夜お婦さん
ホ。左指を作が宮ございまうた。若お一個でお召が悪きやと。

私もあうませうト丈より二個い意洞さげて。お情が
方ホあうゝその影しをあしけまで。お情い左指うと云
こざうロ数もを声ゝホ利ぞ。打ゝうとを知うゝるや。
まゝ知うざるや丈左来つい。侍女花吉ホ召づひの。影
泳ホ抱を持せゝ。ざうと閑て入来アて「イヤこうやア
張ゝしい。おあもこの沈隠落でも。出来ゝうして二月
ざうア。些も氏方へ来あんざ「ハイ旦那さま出撃げん
ようゝ。マア旦那お吹抜ざせ。癌婦の開ゝさ。家根が

漏てゐる雲が落てゐる。こんあとを〳〵弘まいつて。若んでゐる
ゐやア用が足らぬ。そをこゝ〳〵お赤招生きとの死ぬの産を
きとこのと。変つてゐるのある変ゐ。集めッこゝ出まんゐ長
屋の役。大抵五月塊ゐちやア。ぢぢいません。ヲ、産を
きとこまうせぶ。お耶麻さんが何招うおめでえいか
催し。さぞ若ゐゐお祝宴の見招さま
ゐお吹あきの〳〵。お掃しうぢぢいませう。何招う
左招ぢらうといふゐ〳〵ぶ。まぐ駕う初を祝〳〵ョ

十二〳〵遠ひいぢぢいません。何でゐとを〳〵四大切ゐ。招
きたが宜ぢぢいまん。泳左招と極つ〳〵。陶猪の
老爺へゐきやく知らせて。支〳〵淮徒をせぎアるゐ
めく。コレ花吉や持て来〳〵ものをく出せ。バイ食
あげまんう。左招サ食出をゞ宜。丁度ゐ物
つて居るう〳〵。主処でこゝゐやア出入の若ゞを訴
で厠居の菓子ゞッて。芸ぢう紙〳〵ぶ。奇羅で
玉極めづら〳〵。一ッ家若うと名つてそをゐ

とうらやア当時流行の。甘味楼の形結び。食ちやア
何様じう新らしく。随分奇葉ふやうなのヲ
ヨヤ〳〵まア花のやうふサ。ようく庖丁が切まんねエ。私ど
ものやうな鄙のめい。滅多ふこうとも出来ません。
丈ふとのお菓子ハ粉でこさいますエ。とんと硝子
のやうで。中ガ美赤で。何様いうことのでこさいませう。
マアお情さま位鏡あてゝみなせ。何と美しいぢやアこさい
ませんかいなどお情いまふまさんとうさ。ようこさうて

全言葉ヲ丈とうらやア手処の宅の新製で。上の皮
を金糸糖ヨ。そしてふ紅鮹を結とうう。形奇葉に
ふてゝるのゝ。マアッやうてふふと撮んで出せば美物
ハ。當ふ我せてまうりをふんまう。何じう猫るのも。
何仲あいやりでこさいまうそねエ。お耶麻さ衣も一ッ
石あゝとまーナ丈一顆猫てん。丈とも此方の
形結ふまるう呉今位猫を結まして。深ふお版が
ようこさいまうそうう。まう〳〵後ふいう〳〵ませう。アヽおちハ

お止太夫の身どころ。滅多なものハおあがりでないト
いふの由緒実にいづれかで何処かるに。針を持
つる口の利ぶり。怜悧なお耶麻ハたゞ一言にも。胎の
潰済ぶりハきゝしど。然あれバ俤ならて看てけり

第八回

お嬌ハいつもで胎むやくやと。ぞろ〳〵どうり鴻に丈なるまで。
まゝ華勝も看るにまだ。わ多き菓子を奈にゝも。何と
なり漾まりさむ。色にも出さずと思へども。阜量選

られ女気中ハ。右に左やらと眺ゆりつ。ぴらさへも多かるべし
「文」何指ど㒵絡れくらぷがて。おら看るらくも。甘味ゐア
おへ。お嬌をりぐ菓子が辮なり。お結を絡なさ「嬌
十二 私しやア宜でございますうら。お耶麻さんにおあげ
なさい「文」ゑらしやア。お耶麻にもきるけれど。㒵に入れ
せずると思つて。折て来さのを。左振いもしと張さず
ざ「嬌」何も張いやしません。何で私が張ましよりのう
「文」サア何で右あげましよ。折角旦那がた振ら作に。

彼も猫まいぢやア わく 見形 否 止まるが宜
のサ。行ぐ ぐ ねへが 此 行 機 猫が中
ぐらわぐ。おらア 稼 ぐ 赤。面倒 赤 ふ 猫ひヨ。サアお
耶麻 彼方へ 彼ら。華膳も一所 赤 出。ア ア 行ぐ
面倒臭いト立 赤 かるを引 ア 今 食 ん
が あがってまるきアね。お 飯食の間が あいらたぐ
まった。私 赤 ア 先刻 ふ。猫 さくって 猫 さらて。蛇が
ぐうく まるまるけまど。此 猫 赤 立 猫 赤 結 てあるのを。

崩 さも 猫 まりごとくなまして。四を 恵 して 猫 るのを
ぐぐいまった。丈 ふ 見形 ん 私が。頂いても宜ぐい
まるく て 位ぐらせ 猫 修。崩 ア 赤 ア ふ を わく。
コウ 猫 で 手 処 赤 ある。小四と 箸 を 結 て 寿 ハイく
十膳 若 と。赤 四 を 移 て 来 ま と 彦 猫 を
を 裏へ 物 せ。 て て ふ 方 ふ ち も ふ く 赤 て 膳
ん と 猫 ら が 宜。ア 彩 猫 も 手 処 又 猫 る ろ ハイ
ふ 赤 猫 ま て サ く 来 て 猫 ろく ト 侍 女 ど も を

味うして。立派不結る形の料理。かの菓子まで
殘らず食せ。右左まるき不不敢ふりて。貴切あり
ものありけまべ。又多つい美くへもき。お耶麻もとも
人子食へ。ゆく。彩て翌日不ありけまべ。お憍い右左
不石易うべ。一人塞でありとけるが。かの侍人ある遊
を。招きて密不人を遣ざけ。小声不あつて孫を進め
一吾併ものおうくもくへ来て。彼老半年あまり。初
うその通を何ものかも。不自出ふとものあ。形しと乗不

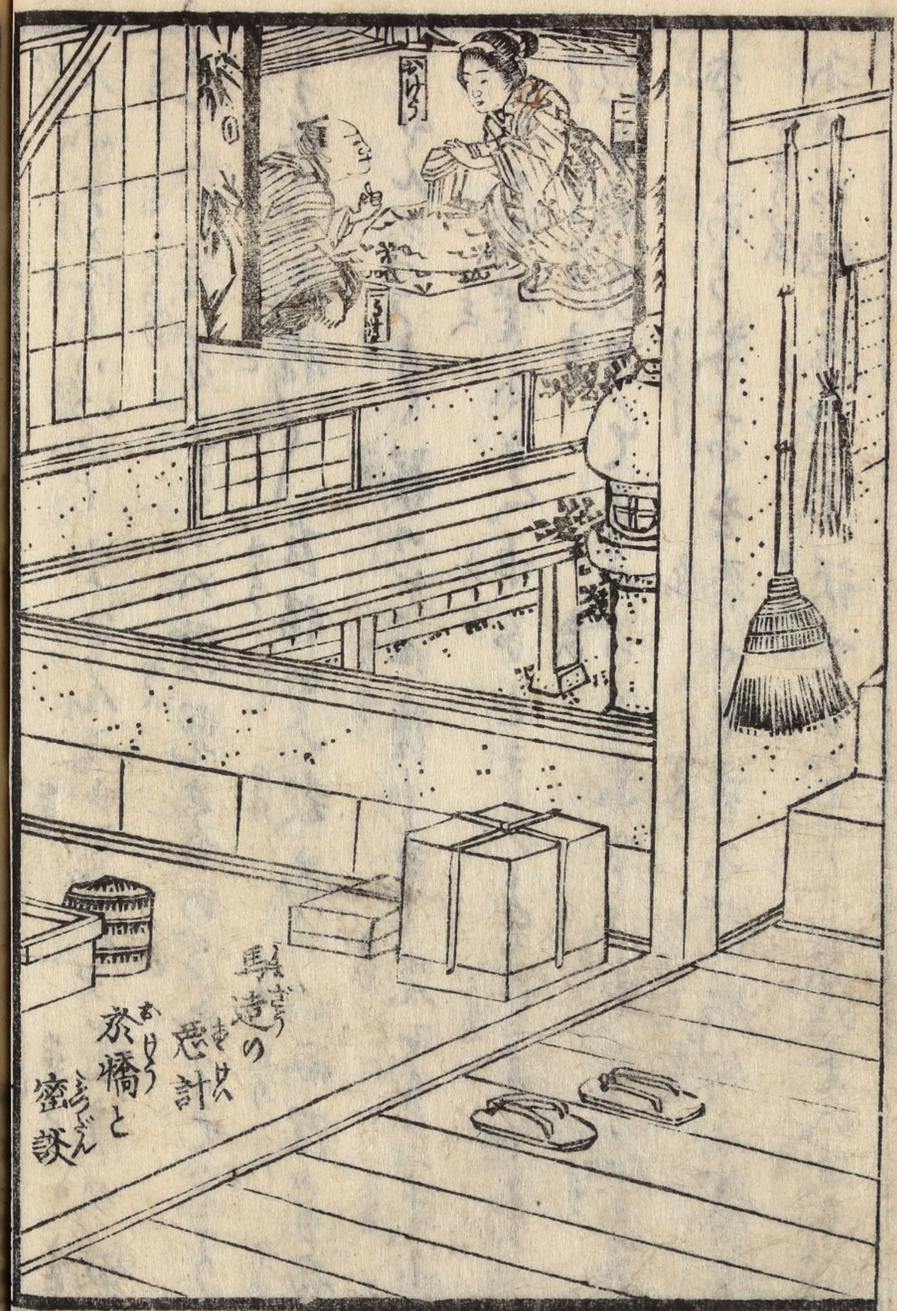
あて蕪るいが宜やうざけとど一生涯。是でも孫不
つまと。あいのの。何卒ものへ宅へ帰つて。老爺さんの
跡を継とも。又であるもア他へ縁分とも。あるこいのん
ざトいふ不馬造不實新「そこ夫生と何故でそざり
生ん出方へお出遊ざ〜こふ。改めて四婚礼の祝儀
ハござり生せんが。先生攘ものお形帰四さ。何も極
ら取扱ハござり生せん。亦左招あまばこそ陶綾の
見形も。門承知を赤をつこと。然もあくて お妻ろ。或

ひハうんの四容かで拵給何拵あるう者をあいてう者。
と云うバうんが此方が四大家どッて四承知あいが。
多をを不今さうを拵ア。何ぞをこれ人不深ねと
でもござりをそうト問をとてお憍い吐息吻き「丈
ぢゃア方ゝその云味を。殺うと知うあいが。初めハ
吾併も乳ちつをぞ。で雛湯ちて嘉とが陋く乳
を付て容子ををに。金併お耶麻さんをお彩婦
不考えと思ハやうを云ごけをど。吾併を猜てい

云勝いう。を処で表個とも一訴不咲で。極りもあり
不お客あると。実ち不吹とともあア。実ざうが方
不でも。疾児さんが出来と云うを。そをを本妻不をさ
うと。更い老爺さんが拵てあるさうど訴ガ
今回お邪麻さんが。拵振不あのとちゝ嘩。実
ち虚うと思つと処。昨夜自分不来ての彩！。
夫うと老爺さんの方へも今日ち聖いお初ち世
中て来るごちうた拵して見をバアノ嬢い本妻

音俳いまア何とも付ぶいのそで妾といふやうかりの。
史も親ゞ承知のこと右左いんのハ悪いう者うあいゞ。
他人あるゞ者も蘭も。物と様でと下ホ。あつていい
漆ホ極りも悪く。人も何とろいのゞごらう。史ようと
いのを完へ降つて。音俳いつとうで何報あるとと。
ある方ゞ多ゞ長あい。ウ馬造右報でハあいう。女ど
もホ喫えるとまとべちやくちやと嘈まいいう。変
して人ホ知こせ生のヨ一へ立あホををやア内祖のをを

人ホまうしいう出せんゞ。出へゞちやア考壌ゞ彼
見と出昔芳あるい猿児さ女のゞ多ゞうてゞぶり
まんゞ。成程く古拒りゞ歌あうハ亜理とも存
ませんゞ。マアよく穢つて出焼ゞまゞ先ををホ史ホ
ものと。蟹ホまく水ゞとまうして。生まてうゞが
泡も同奇。沒てまゞ考ホあうを。を脳とふ
ゞうあうゞ芳ゞを呑ゞもを歯ホ蹠脳。何も義のを
ホ出ゞ死を。あうる訳でもゞぶりまんゞ及をん


馬造の悪計
於橋と密談

あんなら私も。初めてお伺ひまうしまして。今さっき来
ました。お不在際でした。旦那様に。まうし上げ
ます。マアく。参
事い私ゐ。紀してお意あるさいま「橋」あるわけで来方が
方お振云てくれてば。何もかも何も世話が。来て来
へ方い何お振まる様なりご「橋」何お振と申てたのこと今。彫
るのこと恋ッかりこで。恋ゐ思ひ按も為ません。何お振でも
いく一方いごぶりませう「橋」お振ゐ何お振も吉弁ゐ
い。何ゐ仕振いあるまいと必ずふが「イヤ」お振でも

ごぶりませんのサ。清る訴がアノお腹を。何お振りまうせ
ぬ。ごぶいませう。まことその上ゐお耶麻さを四病
私ゐあて仕舞ば。自然生攘たりへ。為が来ると
中ばりの。そ主も私がこの方対ゐ。些仕方があります
「橋」お振ゐそ主ぢゃアそ方ゐ私がこ。ア
何お振あるとのこのエトと再こ問まて馬遣い。
時ゐ首を傾けてあり仕る少侍く。お情が
耳ゐ口をうせ「マア」初めの大師向。麦下い生攘

も堪とア。お働らきあるこゝろ。ないちやア往ません。せ
「音併ホ出来るゆ。そらもやア何でもさるのサ
「そらもやアお出来あるゆでござりません。そらもやア
形でござりません。ト何う寥く低語声いこゝろ耳
へ通ぎるのこ。作者の耳の意くこと。その声い聴こゝ
ぎ「く吉振ウエ。ゝーあぐゝ甘く往ゝう子一往ないい
ことがございますせうゆ。更ぐゝ見まうでと遠のい。別て
ゝ処い伝実と。ゝ乃見てあるホやア往ませんゝ。を

と処い生憎四ホ在ホく。お気をつけイ、あゝこのまゝ一アイ
更ゝ吉振ゝ主従妻時低語あゝそのこ後
もゝこゝのゝ。お耶麻ゝその秋ゝ舎ホかゝ。今
肩お憍ゝ所を振い。仏の程ホ一杯のあゝこい愚
ホ人ホぐホ。初ゝぐゝのその亦勢。おりゝホこの対
図ゝぎも。胎孕ゝを恨むのあぐし。いでいせんと笔
勝ホ。お徒ゝを是ど華勝い元ゝ活気の性をゝ。
譬ば何とゝいゝとも。此方で撫ふゝふゝ。倘ゝく

恨まぐろ涙ちぐれ。いそで俱くに新ぶが。親妹の情
ある。恨むい向人の恋しきのあり。世も仏かけ
ふ。亦ことよりい牧田素て。跡えの世結もさぐきふ。
只身を大ふ紀外ふも。よくく仏をつけくと。
旅して二三日逗留し。陶綾の里へ帰りけと

嵯峨迺假寐巻之四終

東都　松亭金水編次

第九回

須い西冬の末ぐろ。例よりく暑さふ早く。朝の原の粘
竹ふ。あきりる新い色ふ沼ひ。動もきもぶ風あり吹て。
いとど多けき英唐時。丈ふ西つい酒と殺を執りさせ
て。橋ヲ弟意。西の蹴へ来ると。一風の吹所為ら
秋日ふ。格別多くふいとやらぶ。一西陽らと多ふ

けれども。婦ぢ夫ア淋しいろう。餘とく指まして来た。何程ぢ
火ハ殺ろて居るク」婦「今日火を殺してあけと。分付ておさ
きくとガコウく。そを処ホ居ったのハ誰ぢ。火ハ殺ろて居るぢ
ろう。「ハイく殺ろてきておいたとまうせうら
婦「左程ぢア。貴家の火ぢ。ちへ。波山指て来て呉ホ然して
思程がお酒ハ殺を。指しとへ来ることろハ家よく待
呉てあくガ。然しそ例のやうホお粥をつけナ「ハイくト
丈ホ来ハガ指して来アこーよを待ちと。度蓋出して

ぢハア右左警を雅るろう。程でちう考て指さこ考ホ何
程ホ来ガハ多くこの警でホ安ろア新人のサ「婦
ちとでホ思程ホ程ホ。亜度を程ホ程でぢまて
う「ア〳〵〳〵彼家ぢハあるア。その位ホるアあるア
のサ「婦「ヲマ夫ア殺ホ左程して居ること。私ハ彼程でぢの
まち子ホ金ハ警用の動定ホんざア。是とでホ分ア
ませんヨ「丈「女ハホ金ハ食さろぢ。ちうこを手を
暖く〳〵ホ初るのサトハうち渇ホ居ちハ五加ホ「婦「サア

鍋ニ今ハ煮まセマア他のお菜をお腸の冷るいうち
あゝりまシト温湯ハ猪口を深ク入る。面洗をさし茶
ヨバ丈夫あらうとて先ヒろうか。行水ニ火燵とい
ふもの。這入ると出るが辛ハある橋を延でも宜ごゝい
ヨうきア私ト見より両個いと辛さ。傍へ入さうけ橋ハ
い。湯のさめつ酢かゝ。ろう辛ハある丈ニ多いハ。お橋が
茶をおりと見結ク丈ゴウ。お橋辛さうハ丈ぢやア私ハ
お前ニ茶ハ仏合ハ。石わぎん。ど思ふ面ハ赤ぎナ橋ヲ

並べうて。湯の准備をさるあハ橋半ノ弟子ニ茶ハお客さう。
お湯ガ出来ク来るうち。汚くとも此火燵へちようと
お這入あさい丈ナ丈いろまハ火燵い玉極宜。マア行ハろ
香波あくらうト這ひもぐハお橋ニ方ハ膳ハ橋ホンニ客さう
ごゝまます子。行水ニハ彼地ようこい客いっと沢ひ
まん丈茶ハ入ハ茶ハ。今年い全体客ハ多さうご
隣丈ハ不紅ハ人並ようハ。答ハ性をごゝハうさうう。今ハ
行水ハうハ人と邪つてうう。洗水ハ紀るとゴあります。

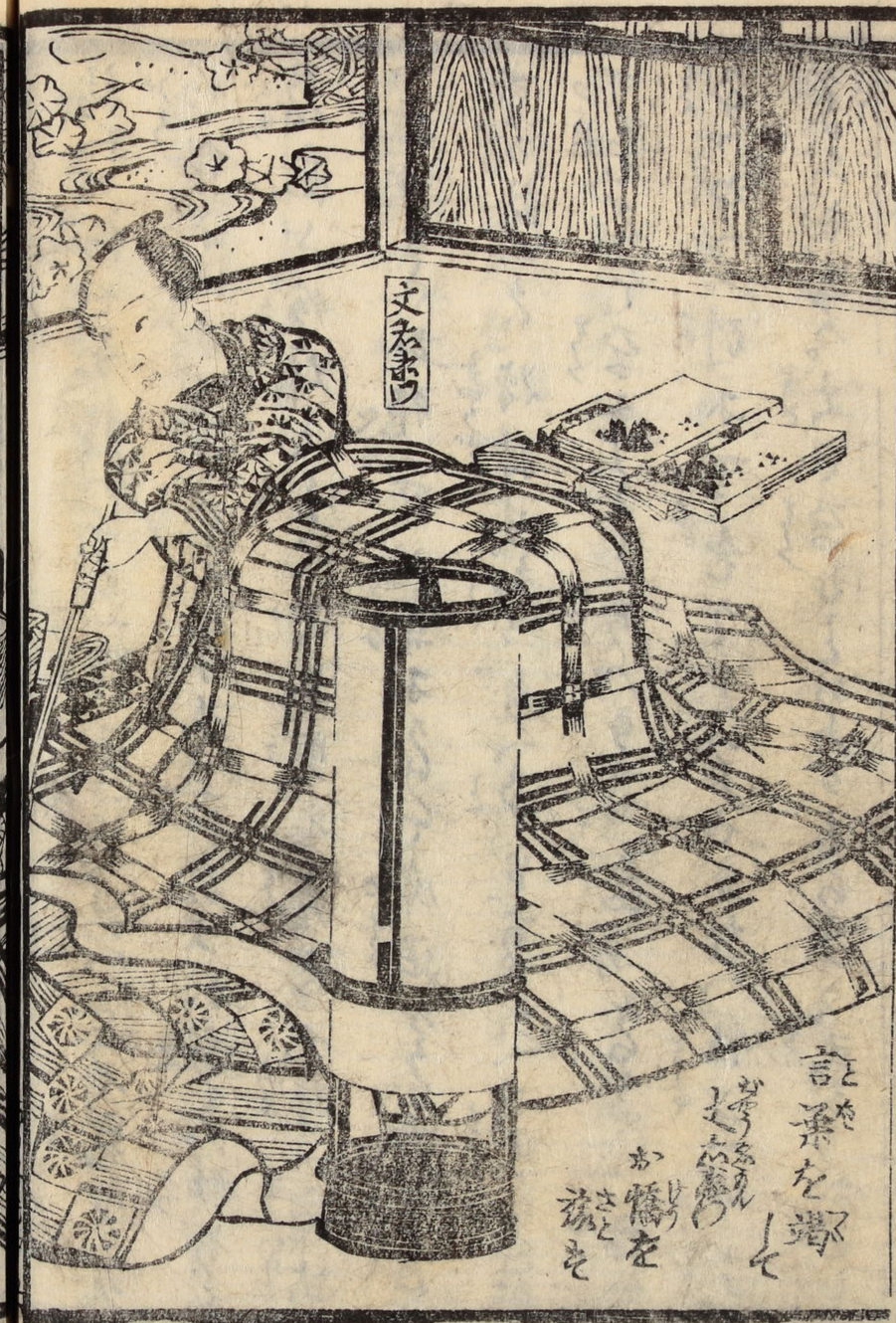
夫ごろう孫兒さんおぢぶ。出来あいとまうしまちをョス
よく之報ふことをのみけをど。古報と限るも為べきう
ごトのようち蝦ゞ出来こうと。下女が指動をを後蓋跳
子「コレ〳〵之処ゞ今の次第へ。その鍋を架てうるを大うさ
煮汁ハ入まてあらう」「ハ」沿ふ吾倆ゞ仕ゝ。ヨヤく
こまふ美味ごろう。荷ものをごゞいまを子「古指ザ合
飯ふ堂ごう。今日い濕気ゞ無ゞあいうう。香をあげ
半色と云て戒しく。こを由ふ山美のあう宜けをど。今

初めこうゞ。男い何指ごう女と生まれて。長病をあい者
ゞごゞのませう。何故まこを指ふこを仰ますエ。
何を長病をヤまくエ化ぢゃア移ゞ比比中。何
故いう例と袋子ゞ遠ふ。バテ異ゞ込と云こを。教
四あうこゞ初ゞ云ゞ。長く前ゞ此ゞ。筆勝ゞ来て お
邪魔ゞ一所ふ。こく来て越んど暁ふ。お故の服を
ゞうく。勿論書下ゝ云こけをど後
妻時急あうんゞ長る所ゞで。云て只アヤア角ゞ立て。

と
嘆ふるもあり。後ふ。涙ながくるまあらうし。そのこと
ろ見を捕へて。云言と暴くぶ過ぎ中。何ぶろ塞りて泡
を云て。亜ふ過辯を言るんぶろ。又我ちどのるまわ
ふ。幸公人を叱て見ろ。何ぶろ異ふ見えとのハ。邪麻
ぶ船室の一件ぶろう。自己ぶ毒とふ可愛ぶて。ッレ室
まことのるう。又ふ耶麻ぶ児を毒ぶくば。島ふ
うけて何まも。自己ろとふ立ぶらうと。丈を今ろう
苦労ふまるのう。丈とも化ふ船とハ。狐ぶあろ。何

船ぶ。何でも程ハまの一件ふ。遠く移ぶと見究めぶ。
何程ぶ立ぶでも遠くあるめ。丈ろふ。あまふ船ぶ
愚麻ぶ。何故とも化ふ児を毒ぶ。帰ハ弟妹
ハ様ぶ。まくふ耶ぶ麻ぶ島ふうて。威張ろふ様性ぶ
あるふ移ぶくふ。特様ぶ。移ぶ。わくるまもあるぶ。又自己ぶ
可愛ぶて。室まくとろハまふ。悔い
るまハ移ぶ。到ふ可愛ぶるとハもわく。性質可愛ぶ
るふもあるう。丈ぶ室ぶとろハぶあらうう。丈あろふ

かけう


文をかく
詞葉を鄙して
ぶんをかく
かなづかひを
さとびそ

この位可愛ゐて来るけれども。まづ学夫様に何様しく
犯罪で。手処を考げつて又さが室。見たりやう神業で。
人の自殺ふ決ふ為へうの。丈かいそんとかおの知らる。
直様とそれ又ッ俱とホ。歌びとをまもと板高く。ホ
い人ミるの才張達へ。何様ぐまづ様ッ多解様ットいそ
まとお情い勘弟ッく。様不車を推ーかりるとホひ
の外ホ驚示ッて「様ホ号ッとのりまこと。実下かの高麗
おんで何も様私とッうぐやアぐざいませんが。お那様さん

い美しいと。ホひまーッうの何とあく気ガ塞で。まんぢりくと
持ちくの。麻麻ガ多ッ生て。四悪不ある半ッ年ホ手で。
業ッの悪いホ由ありまこと。丈い一向気い付ませんが。左
様様作ッう遠ひ由ある手い。様不変でぐざいまーこ。
よく考ッて。まぐ今半ッ年の。様作ッ丈ッ見由。ホ
我慢ッう変ッて。丈ぐ様れと家ッう。様ぐこ
所へ会の出来。まぐ仏あい女ざと。お様由ある意
さらうグモウく見ッう様ホ気い。壁ひど由出丈

せんさく。何の辛抱忍して下さひ手ト品ひの外不陰
被らうと。何不安協いきるのうち。手と何とあくん
程を。寄りて不ろとび為しく有。呵くとうち笑ひ一
度丈ヤア些由仰細有しぶ。何指由ひ石のきうでアる
と。奥書不物のかうこ分うで。その事不由して恋情
。方指うと云て表立て。立波不孔屈をりんで由
あり。自己由奥い国つぶ。方指吹て又アヤア安
んぶ。サアその狭りでモウ一杯「モウ」私い待ち色夫せん。

丈で由今家へ来いせん。例より待ちくこ一コウく自
己由大分酔て。枕を為波助て異不一寸処へお
寝と風をひき手伝ひて逆とてのみ出せん。コウく
能で居るく床を敷ナ。そしてこ由元対ヤト吹て下
女ど由二人をとある部屋を引取ち。上の石へ床
を敷べ。お情ハ丈ち多ハ不寝石為を石ぜ更。その
外の上為を脱捨て。俱不部屋へ入不けり。お那寝
いてをとより筆揚ゲ。帰ク一後由右ヤあくん。左ヤあくん

と掃のお情ゞ。人の程を案ト苦し。よゝあさことを
あてげりと。今更後悔するぞうり。朝不欲里不仏
安うう迄。さゝぬど不兵あるゝ。分へ死所中常とゝ
諸ア。略こがちあるおくゝ不。難協ゝ仏死不。この程
へ食多きゝ。日毎不細多ゝう あるとゝ。こを不傳居る
女ども。きと烏吉もこのようを。咲よういとで案ト。醫
師をまのきて業を進め。右不左とのさとどさゝ
て設ゝ日をゝ。兵物案ト不驚く

と。樂生きるその所へ入来る丈ゝ。驚くゝてお邪
魔ゝ。おゝひ一おゝの拵と安ト。ゝ。若多遠ゝこを
ゝ人ゝ。死屋を云て吏せゝうと。名つて時欲付と所
ゞ。おゝの名人ゝゝ大遠ひ。勿論先ゝ世ゝう。何とゝ
名ゝと多ゝあゝさゞ。ゝゝ名ひ吉ゝて人ゝゝ。
古拵ゝ人法ゝ史ア拵ゝと。瓦ゝ気ゞ付ゝと。自
己不拵ゝ拵ゝ。ゝ何ゝ拵不拵ゝ史ア及ゝ
ゞ。何拵ゝこの法の所至拵ゞ。美ゝゝゝ。

今こゝ欲い筆ゝ口実藤りざ。左程痛が多解て又
ア為ア。何ゆいゝ不知ア及を移くと。実ゝゝ流い酒ホーて。
随分元体ゆ由云て おいゝ。実ざゝゝ おおの方で由。
今まで の通ゝ不 志せゝ。此方ホ隔る気がおると。終
先不由隔が少で。指絶美しく他わくゝゝト実て都
麻い業ゝるゝ。楚ホ安きの家への通ゝ。此方で岩ゝ
さゝゝ不由家いゝて仏ホ十分歌びて「ヲヤ左程てぎ
いまゝゝゝ工。左程ゝゝ指ゝゝ。痛ゝて恨ゝくゝ。

私の愚ホ子強。モウ此ゝゝ何由ゝゝ。多体通り
ホいゝませゝゝト元来恵朴の生ゝ由多。御疑ゝゝ仏を
あく。今まで塞ぎ拘ゝ由。おゝ弱ゝ雲を吹ゝゝゝ。ゝ実
けき月をゝゝざく。清ゝしくぞ おりひける

第十回

その家ホ あゝど風い移おゝ吹て来ゝけ。ホ耶麻
い一個火燈ホ暗て。緑眼とい中年で。痩ホゝゝ迦
ホ暗。侍女ふゝち 對ひ「ゝゝ方いゝの年をゝゝゝ

うえ「ハイ昨晩も稽古がお寐てから、一二冊讀でおきました」
「左様かへ。アヽ面白いのふ。兄はアノ稽古に、おまへが姉
さん三人とござると、昔の例でも幼稚ときから、誰をつき
あがりて唄つたが。その所謂を手ならひのどこノウ。この婦女兒
のお絹とやらのが、情合でも何でもおはけもど實意
を失はないとおもつて、仕て所謂淫義ない姿で。その寫
と云命まるとふ齋波吹とおきいやうござ。蔵あゝどころぢやア
そをよりか外に。何根も仕やういあるまいノウ。まアそれよりか

何根ならんエヽえへ「左様サ自己が戯讀しましたと。いかし所が
板の字の違ひも外に、て個まで。人をすすめるといふ事
何根なりのでも変なるに。いやしくも八方まへまんまい「鄙
左様根も、さきない切るい時に悪にあのでも古く
つてゐて仕舞人も世間に多いやうだ。
おそらく障子を開て入來るお嬌。下女は立寄る奥の
間へ「お歸なさいましト云ておお耶麻の火
燵を出て「ヲヤよく入らつしやいまし「アヽサお他人がよ

あの。天滝又庭へ迯入て お在ヨ殘ル共の者ども ア。
冷ると迯ず 者のと。ドレ書附ヨ火鑵へ迯入ら入ッサア 温
まうく お出ヨト あて 船りし 掃の云業ル。お耶麻しる共
管病くて 丈るう掃さん日お迯入あるこらく 其処の型
蒲壺を掃 さんル爰てあげ方で サまう方の 飛子がさの入子。
徐ル気が利あいウ 「ア」 何だヨ よい。く 室見ぐ。ホンニこの二
三日ハ。乳の吹面ル 為う 徐ル 不多い子。今 拒い北の方 洗物
へ落 ル が 洗ること サ。 そまへ 方 根と お耶麻 さん 書附ず

うんの壁をル。碗を 磨らう 。 滝ル 甘く 出 来ること。
お あル あげ やうと そうして 持て 来ること ヨ そこ そこ その
背 酒 を ちう 出 ア ルの ば 侍 ある 侍女 ガ ヘイと 答て
綿 出 の。 盃 茶 碗 を 処へ あく 「ヨヤマア よく 出 来 ること
子。 丈 あう 亜ル 頂 うト 下女 ル の ひ ひ 温 さ 安 る。 ま
時 そ 処へ 入 寿 白 鳥 吉い。 爰 居 の 外 ル 家 を ひ く ば ず
か 橋 ル 一 緒 あ。 そ お 耶 麻 ル ふ う 対 入 「 ま の こ 祈 ず
こ の 次 中。 ア ト お 天 乳 ガ 悪 う ま の で。 出 来 る ま て ち り ま ん

が。明日へ旅立者ばかり。淋ふ是くらいなりまして。そうして
段々ごぞうまんせんのよくかに花をやくらいと。ちーと
まうしまうと「方根ろエごうも仕方がないと。文あるまうと
吸法日の羽。モウ一遍祇て見ふ「ヘイ〳〵畏まりました」
鳥音仏を祇らてうぐ「ヘエ」お猫さまが西洋布へ更
紗をかしてお蒲団ふ。あるとこ作ごひざうま
を「方根ろエ花ー西洋布。ろひの外ふ弱いぢゃアあい
「イてくちの弱いのろふ遠ひません。夫源庵西へ紗の布

でごぞうまん「文ぢゃアなにお耶麻さん。何根ふ形を
お意せご「何根ふなにの。あり去せんりろ。何ふも何ろと
云て意まーろ。大ろと蒲団ふ仏今ろふ形を
でごぞいませうー「アノ馬ー色ハ乳ぇが。ろ。猫番ふエ
いいーません「方根ろ何方の文紗屋ご「流門町の
あ表とヤン。まの文紗屋でそこの猫金ふ一ぢん。ろうご
とヤまんが。表ってはんまんと猫くふ文くしいのがごぞいまん
ぜ「方根ろてもぢゃアあ吾俳ゆこの仕ふ形を意く葉ひ

まるう〳〵と形ゆえ立碗を。沒で出きると湯桶を元の。
鍋へ並べる仲を引て。烏喜いと丼の傍へ停足「アイて
白ひと碗ゆ。ゑう〳〵底が焦つくやうぐ。えやく〳〵下さわ〳〵ぢやア
性根と。りひ〳〵小指の両耳を。押へて。其処へ卸きんう
「ウ」熱て〳〵ト元を放せば。渇いたうと丼のと。こゑか
うち覆て戻かゑう「ヲヤまア否赤烏喜どんぐ。仲のいう
きるを出して。大変をあうとウト尋常きうとぎ兼中
ど。大丼を拭くやう〳〵大筋うして大の消しこのをかきまう。

二三個琴七の鍋ぎ。矣不申こと。を吸つけて「仲」をうとこの
ぐョ。乳をつけるとば冠不「ナニ」考えて癒烏喜どんぐいうぎるを
を出〳〵きんうう「イヤハヤ」考と入まいこと。おこどんぐ居眠りを
あうて。碗を焦つけまんうう。卸して。きうと大きな糸
喜出来赤きうして下さい「アレ」を。和赤虚こと言ゑう。
仲間「居眠」をあまいこと。見
和言矣不云て。お呉でゑの「烏」ゑ。そこぢやア自己が。麻抱と
のうを。ゑと。「ナニ」蒙喜。ゑう〳〵仕方が。ゑいい子。まぐ。仮方

不義千日あるうち。翌日あげやうヨ「お角將」こんが下を
つぐの。食霧と仕業こゝろ。我〻と生涯をして暮るのみ
「ナニ宮ハ子。あゝ〻あぐる。逆の掃除ゞ大ゞ〻ぐらう。鳥若ホ
殘らぬさせるゞ宮。おこ「そめの羅モウ赤ゝ形ぐゝ
ぐ〻と長まず。私〻ゆ今日結ゝての髮をゞゞあゝ
ホいゝ〻ゝ〻ゝと明ゝホ記を云あゞ。ゆ弟の掃除をして
長ゞバ「やゝく お藤ゞ鏡中ゞ。鏡ホ樣ホ。あゝ〻ドレ
吾俳 由俳ゝ〻ゝ。ゝ翌森まゝヨト 出ゞゞか情の

侍女ハ。ゞ洞つけて先ホゝの「まゝゞ宮ゞ。ゞゞのません。
ゝホ淋〻〻ゝあゝまゝゝ「夫ゞ由モウ成刻ゝゞ。ゞゝい
時ホゝゝゝく森るゞ一番樂ゞ宮ゞゞト服ゝて立
ゆけゞ。お耶麻由席ゞゝゞ送ゝ。ゞ根あゝゞと別ゝて
送ハ。俳のゝ由ゝゝ解ゝ。救ホゝゝゝゝの赤ゝと。
礦あゝと自分ホ拾ゝ。ゞゞく〻ゝホ差ゝゝの。
竟ゝゝ簾ゝゝとゝゝあゝゝホ霧ゝゝゝの毒
ホト咬ゝゝゝ ゝゝホ喰ゝゝ。種ゝ烏吉ハ烏頭ゝ。弟を

お嬢の
彫り
茶
仙実と
はくし

乱しく奥の方へ後を座あて逃入あごらゝ、お嬢さまトぜん
四発あるきりまし。ゆゝ嬢ホ多濃四間こ。まうしまあけしさい
義ごぞく〳〵まを「ヲヤ吉松ろへ何の用ど「拙間こぞぞ
つまんろう。四上の間へ入ッあやの「表拵ろ破家い美晴
ごくろう。何あろ紙火を踏させやろう「イエ赤ホ丈ホ白
及びまをんゞ。ゆゝ晴ごうを中可咲赤ものの。富洞を踏
く糸つまをまうト寄処ホ在あ人富洞ホ。火を踏して
ちんホ立ゞ。お耶麻い者を拵あゝ。ごこの間へあけゝ傍へ

鳥「外のゆゝぞんごぞうゆゝ寄せんゞ。お狩さまをゞ何拵ゆ
あんゞ。何福ゆゝ嬢い山を赤。おゝうゝして誰中外ごゆ
ゆ百い四寄現ゆあいが中く赤ろ気い弛さ見ゆせんゼ。外ゆゝ
あごゝる私い四家赤あごゝゆ他人のゆ。お狩さまい色を
領〳〵四同肥のゆゆあまゞ。縫云さるゝとお結ひ拵ゆせ
ゞ見非ゆあゝ。ゝゝゆ中あごゝ見拵さまのお服装ゞ
嬢ホお屋赤さま。私。縫云ゝてお中りよ。四狩妹を
隔てるゆゝ赤居あゝ仏さごぞうゆせん「そゝ人吾俳

も知つて居る。何でも指南するものゝ。又ざらう何振りへ
敵ぐらひ。早く云て呉ますヨ「ト島よく左振りしやさんへ。
中あげましたが今晩の容子。私は当ちの人ですぐら。綿
出の御入部で。コリヤお兄弟と胸に合点。為買仔細
もありませんが。これは大分と無造の態して。不残
大評へ難しました。皆撰にあげまして為なりました。モウ
ばらく不でのまゝ家。お縁りのがおいらうと申。一昨日の
とゝりました家。コク眩暈くトいゝがお耶麻は笑ひ出し

「喰まり家お職着労。何で大事がありまするのゝ御神さん
も此度中の異しき容子もあのとけれど。昨夜日頃を
雑々と存体。今謀不後悔なすつたこと。今日日頃が
妻にお噺し。先で今家も縁切に来て下さつた位ござ
ものヲ「許ダ一意そもおかりで。早く安んなりません。
何故と申ても不人情実意へ。他にいさる事でも
寄。これ孫々の性質。こゝが迹で後悔いのさぐと申一旦
切と。思ふの腹に罪の。種が薄縁でおるくのまざさての

雅があつて口人をぶ口のせんぞ宮四ろ不。仏程と裏表ぶし
て油断ぶあつきせ。那きうもも要猿のお敬。別してお
腹の孩児さあ者四を毒不おき殺せ中ゝさ。モン私のきう走
のが。百遠氏きゝゝう四安殺首尾よくあつて手後不。
お腹を下さつて。ちと天お腹とゝ痛ちぜんト赤仏足
ゝそ鳥者ゞ親者ゝゝそ出来ぬの。足所ゝ〳〵那ゝ人
ちゝ。お耶麻い良所殺ゝうけて

嵯峨廼仮寐巻之五終

雪廼耶麻

嵯峨の假寝巻之六

東都　松亭金水編次

第七回

天を測る日月陰陽時象星の推ゝ地を量る
い稲穀菽麦。あゝい菜蔬の熟する時若も。十数年
の前不識る。這いを天地不私あく。誠あるを以ての故
のと。独る不人い若悪邪ぶ。ゝ不殺ゝの差ひあるとゞ支
ゞ人を計るい雅ゝ。昔の人もいひおきけん。かゝて耶麻い

年中に。そのうへ（毒）朴のんより。娘のお情が伝切不孝で
愛うし歌猫をいと惜しうて一点さうも。疑ふ云の赤うし
不仏の所潤ろ烏吉が練めいまど胸丸為張れど。日素
ようしとその赤ん。知るうの不教こそあっめ。とその云素
不後で。茶不仏を忘けるう。一日まど目中の法お情い落張
の重箱を。侍女不指せん。足を立ちあて入まると「お耶麻さん
モウ墓四猫をお求めとうトのひつて手処者賜くつ茶ぐう間
うけうまて外を祝し「ヨヤ挿さん入ッ来いまし。イエまど四

猫へ猫ませんと。ぴんそんとせ〜ぐ烏吉が呉ぐ。こそと云
不ねづき。ちゃ丸今猫〜とぴんそん〜て。ぴんへが手処の次の間
不猫ごとの毒〜ちと。モウお情がつる赤〜ぐ。忽地虚云
と暁ら出て。却て後の為宅〜ぎと。ぴんへ不間て接
接不。岡ぐ〜ぐ一界。近も「仏猫も仏ぐ今羽ッ
ろう。胸が悪くッて参りませんうう。まア墓四猫へ猫る
い方が。宅ろうと存ません「ヤ〜左猫ろエとりやア墓へ子
脇梁不ろうとその麦坐ぴ。猫で胸が悪いと云へが。

おあいの月お出あつて。そんな振おてふあの苦サ。何ぞ猪和
ぞも中うわしあのう。今こそ青猪の。お重猪を要つさ
うつ。お為ぐまぐおあるう。一新お猪ろうと指して来くぐ。
そもちや夫ア何振もいけるのれエ。是お人様お奇麗お猪
これト指せ来りて猪を。お耶麻のあへうちつかけば「
ホンニ又ちでぐへまも。様お肯矢さうぐはもど。何振も
胸ガ元くまるうう。猪ちや夫ア悪うぐさいませう「夫ちや云
矢ホとも言そもあいが。何ぞ此うち下ニ。猪て居る気もるのエ

「ぢうも兵今の「左振ちそちや夫ア止ホ。ヨ。ぢ。今ガ大ま
の嬉ぐお。胸ガ悪うう。雑くまちや夫ア。何振もよくあるまうの
うう。お医者ホ又て貰ふガ宜ヨ。此処へ来る順伯さんハ何ぐう
何振も下まらいガ。ア。喜へ来る猪居うい様お。ぐと
いの場で。為イ元や生管元ガ。あんさの為の時ホ。是派
猪居ホかるこいう。お。お動ってう。お蓮ガ為ホ廃ウ
殺つて。順伯さんを。ぐ新ガ。ぐ。彼人の手様ホいぐ。手
処で夫妻人の実を為つぐ。猪を居ホ。ぎらて。又ぎて新ガ造

他日あく。顔を収めてその後。けろりとして例のあそび。世
由変ってこうもいいとサ。何でも酔ひどとも出そうぞ。アノ馬
鹿が指南が数つて。才日ぞろ。葉を黄つて。色々人
間く成て居るこそ。実に恋つや桂義ふ云あいでも。面
造ろうこして。ぬでつんさん。出張なとく出入ごろう。因縁
とく知つてお在サ「ヨヤ左様でどざいますう。お蓮が顔の
色あいでも。私いわりまあんど「情「左様ッ。傳ふ大強ぎサ。
更ふ因縁が出秘義ごろう。コレ怨膳を拵て来いノ。ヤレ

そこを推て来とこと。何様ふ可咲うこらノ「ヨヤ更
ぢ大ッ痛さんい。諸方ふ。ゆきぢ拵ごんのこエ「情「泥ふ様んで
当秋のサ。更ごろうこのひた。お母やお蓮の新へ社。何様
ふ人間く高つさこう。お母いまもらて暮るご。あつく知
在あい女ご子。お母世様びふ。吾倆と遠つて
用意ごろう。こゑが閉て病ひふ。ヨ「自己でも左様ふ
ひ見たが。何ごろ意恵様でいつ見せん。「ドレ〳〵当造
ふ左様て。諸居を呼ふ。諸人様て立てゆく。お

耶麻い早速の優人病気。術医者が来ていろいろ。
何処も何とも為いろいろ。ハテ何様いろいろと見武の。
とふもんをいろいろ為る打ちうち鳥音が入来ると。色々ぐまつて
小声あて「先ずどお帰さるが立派ぶ。持て来て入
為さいます。こが。まつて待ぶ。ごうどうもせんう「まず様の童
結髪。業ちうちうお髪あるあ。一所不落ぶうと打てお出
ぶが。お方の美見を笑てうう。何ぶうこ気味が悪いう。固
相くりう喧嘩をはて。頭くそまぶ落為いけまど。文

為うお医者不見せるが宜。そをもアノ順伯さんい下ぶうう。
表へ来る踏度とうりう人ぶとまど。丁度馬造ゆ人易い殊
不此方へ出入ところう。今不呼び不来うと云て速不出てお
帰ぶとうぶ。吾併い来い何とゆへの不。知らあい人不お復文
何うを。拝麻まるのへ度ぶれエ「ハテ子のうさ為踏為とまうう
ゆへお廓へ出入をいろいろまんが。そう振不とまぶ文アぶうい
まそまう。文不来う撮赤シそぶ四焼ぶると。のう不ゆ毒ぶ白
盛さうう赤。太胆ぶうう警備医者。何ところ云作てお訪

あけう
おやゆび
於憍が好んだ計
陸胎の彩を
まもる

さくあ丸
う右

まをうまし。珍せまへ進不フレお菜とのうを必変仰振
物を。御食をるう高進ませんト低語果ね不人の素粉。
陳つまを関てお憍をまのう一先刻左振云と碕唐さん
ど。今廊へお出ざと受とう。亜不ほたこへお連まうー
ョ。お耶麻さんこの方不。う〜学ろうと乃てお異ひサア碕
指さん四を恵方ー不一ハイ〜そまへ出ましうナ。但粧振と
帰りまで。お蒲巻でもお。しき袁抱ざ「左振さ子。おさん
蒲巻を出ー亦ト彩ろの呑込こと指揮まる。今うさう

猟ともいひ彩て。お耶麻い蒲巻のとお岳と一金併
丈丈て近畿い。物のあもありませんダ。今粧ろ物振ー
ろ巻ざ。物ダ恵いのだございます「ハアそうそうア困つと
りの。ろうお狗の恵へろうへ。格別陳りもござりョうせん
ダ。丈ダ法くありまんと。墜脇いうたこともあり。但由彩い
ありません。ろうとお膀をトるを把て。膀を考へ作不森さ
ろて板をまう処此処探ろまう。額不八の字不育を頂は。
お憍をろ茶ぐろ「お揮さ及お大あたござります。見へ

あり〳〵一通りのお怪こでくござりません。四肢内の筋骨
さゝげ。乳綱を離さてござりまるパテ的振りえんの物
ホかあり多くとゞ宜しへげ。薗振ホお振いホ九。四半
発ホあり〳〵げ。まゞ的ホ丁度てホ。持あハせの四九
業。こゝを百あゞの七四境〳〵まートりくて腰の明卵を。
把て業をとり出を端ホお耶麻ら処へ記るる烏吉
い筒より引へ下り。お憍ゲ容ら玉者の態ゑをつけて長
〳〵ゲ。偖こゝとおりふよりう。お耶麻ゲ新ふて腰眼を
かあり出呑ホと曉ら去る。ゑ紀い一方あるを。お耶麻い丈
とゑホ点改皓房業を業袋紙ホ二粒三粒を包こて。
一こゝをホあゞりあさゝまゝ〳〵。お腹ゲ宜りいこゝませ。
その中あ四炭業も。洞合いこて差あゞけまん。業袋
いお廓ホごゞまゞ彼ゆて洞合いこませう。ゞ〳〵丈を
豈とゆまゝ〳〵。お自湯ゞ為りよゝまートくゞお耶麻を
いゞきて「最ちゝこて頂きませうト侍ある箱の
引出へ。入まゞお憍いうち見ゝり「お家ホ不おあゞりゲ。

お医者さんが来ると早くこと。支仕のを何様お呼ぶ。
コレおさん丈そこ処の茶碗へお白湯をおし持て来ス。
アレ婢さん今いめ。胴の陰排ガおくしいうこ。モウ些しと
孫まちなヨ「エ」お前ものこが信ごこウ。おうこい所へ孫るガ宜
ハ子。ウ鳥吉方指ガ丈アスいう「おくし他の物と遠フて。
お菜い出来人さんガ。お進てこうあいと胴ガ痛フて。却て悪
いとものこうまちてこう。今ふてお元あうせ拵ものを宜
ごぞうまちせう「イヤハヤお女中さんガこの。お菜藻ひ小鍋り

まん。此方おうものこべいごぞうり出せん。何方でも系簡指
さいこ。ドレ方指あうお恵菜の。調合をいう、ませうト立ば
お情ものこ俱ガ立「丈あう今ガ不おあガヒヨ。何若くも乗く
ものあい丸業の多とあのヲ。欣ふてもあんとものこハト
のこ遠して出てゆく。鳥吉と弗と潟臭吻き「ようこ
猿私の股服を。四合点ものあいあうりまいこ。元来何とも
あのお脂を。ヤレ孫児さんの乳綱ガ切とこの。殊ガ上ること
まん。此方おうものこべいごぞうり出せん。何方でも系簡指
さいこ。ドレ方指あうお恵菜の。調合をいう、ませうト立ば
お情ものこ俱ガ立「丈あう今ガ不おあガヒヨ。何若くも乗く
ものあい丸業の多とあのヲ。欣ふてもあんとものこハト
のこ遠して出てゆく。鳥吉と弗と潟臭吻き「ようこ
猿私の股服を。四合点ものあいあうりまいこ。元来何とも
あのお脂を。ヤレ孫児さんの乳綱ガ切とこの。殊ガ上ること
まん。途方ものこいとをヤて。今あげこ丸

茅こそ。堕服茅不ちびあの。やしく。先うの佛ろくう。
仍旅いときうト。徒を組妻的途方不異ろうけと。
お耶麻い元素世君ろくで。悩惚子仏不何君。知ろ
ぐあり〜を鳥吉ゲ入翁恵。ちきろ少し。乳を君て。
つくきぐいろ不由言弱ぐ。おりんときく。あきぐ不あぐ
殊不い今日の医者い慧鳥吉ゲいふ不遠ひいあきろ。
とおりくバ方多不男ろぐ君ひ悩ろて君ろうけと

第十二回

うきちしあ
鳥音い思按してお耶麻不却ろひ「人を殺ぐい罪ごとト
ぐんが。仍旅ゆ合恵ゲ条りぐ。せん。今の先茅を不ぐ。
ちとしろう
世話向ゲぐろうぐん「ア、ちろやア義不あるゲ。ぐ方まぐ
仍旅ぐるのど。滅多赤を主て雅ろ知ぐると。却て
悪いぐゲあらうぜ「鳥「ア二世ぐ。日仏細あ。ぐの義不義ろ
赤の牝物。後い大きくつくぐ。ぐ。ぐのいまごく。茅
月の茅ぐ。ぐでぐりませう。ぐ。処で茅を服不雑て
喰してつくぐが恵知を。まぐ。義日牝物ゲ半産

いくさぶ。墮胎業は遠く有。まことに何ごとをもなさうまいぞ。
人を殺す私の罪。とりわけ一番を見が慥「支度をなさう方
赤狗の子が。何匹あるゝ者が。蒸その業であること
あれは。みんな墮胎して死ねばならう。左様して死ぬまで
もまあ。大きな罪造りぢやあるいつ「左様逆さに考へ
ちやあ。何ともせ出来ません。毒の試はあるまい。神は悪
あるいは他狗は。嘸して居るでございませんか。左様ら
したものでありませんぞ。虚う実をなさうまいぞ。ナニ有ますま

狗の子の。畜生やこ匹死ぬ。とまらうして為差罪は有ますま
せうか。来月産を出産ドモ。是は自然は死ます。
然もかまひいでなうまいぞ。かの丸薬をもらうけて「鳥
モシお神さまうお為あるは。不残あつてこと成作まうと
て参詣めて出ます。お情の下安い悪業を。嶺は網
てやりて来て「ハイお業でございました。悪ト考うと色は。
委しく考へてこざいました「左様ラエ大きはお厚神さん
へ寄つくト頼参りて然あるれ作。さてどは先ま

為とうて。そも中刻不申をづく不。まと是仮申張ざまを
いと。そのいと下女不取出させ。食事をまうしまうとお情ゲ。
不蓋物を自身不拾。入つと寄りて「ヲヤ お仮を。モウ張
くお寄まひう。何程ど今いい張らもとうエ。然りて先刻
の九業いの何程ものどおよとう「イあまを張まうう。
胸の悪いのようくあつてお仮ゲ空て寄りまうとう。若
いモ程を張まうと情の人申疑ゲ人申過あうくと
かう人の一人。お情い吹くんお歌ゑ「左程ウエとりやア

冥うとれエ。丈ごうう先刻吾併ゲ冥不おあうとうく
けまとど。おうくまうど児女どヨ。今いりけまのゲ見い
大坂の何沢陀ゲ泥花物の接味唐さ。うんど甘うて美
味いお飯食不おあゲとト亀より早く「ヲ、左程ウ。大
ゲ赤用を言まとト屋震て帰エ方。お耶麻い張を
ゑん送ゲうて。毎日朝晩伝切不おしも張くんりの八此で
彼をと見をつけて繰つて下さるお志し。傑不張しい
ゲうあまとど。烏吉ゲいの不遠びゲあくん情しん程

手水をもしまうと思ひたまふ。人を殺人だろうでござる。その
伝切を面倒ながらて折角お呉の給はれ。内証を持る
切仲あるさと云人も漢の種あるべし。お憍いあるぎ不舎
不得り。密不馬造を味ひて「先刺の丸薬を呑ど
とのいふ。直振して一人ぶ蟹あるいぶ。云人ぶ不あらう
ないう。此方も碓不薬をのとて呑せやうと。ちと所を
鳥喜厨ぶを出して離して ちまへ。今日も重徒不
入とて結せて徒とぶ。胸ぶ悪へとって丈も給ぶ何ぐ孫

不全病しくって。ふうふの所を主分の業ぶ。先碓尾
お関西を教んぶ。墮胎薬も その時呑ぶ。丈ふう見へと
稼味噌。薬を入とて結て徒ふ。モウ丸薬を呑ぐとうふ
ふう。丈ふり ふ処へ来て来ぶ。若他の人ぶ給ふて。ど
ア丈ア毒ふ丈ア出るまい子「イエ〳〵毒もいあります丈
ぶ丈ア笑刺の丸薬を「不殘呑ぐと云ふふ「彼
世へ行ア丈ア百人ぶ。一人も助遣ふ。そうも ア甘く来
ふまふと子。イエ 女の位ふ お骨折いあるうわへぶ丈ア

まうせんと密く結ひて馬道へ。毛ゲ子舎へとうち去けり。その
翌日ふ夕ありけるに。鳥音いか耶。耶麻が傷へ来て「サテ釈ゲ
奈ノ一の者ぞ。夫ふ遠ひいどぐうまもん「ヲヤ声掛うへを見
ぢ丈ノ物ゲ「左掛く」昨日まで。逢者を看とを拵仮
ふ雑と。こ粒一所ふ咬せまうう。晩方ううとてグウくと。
叫ひて来こゲ今掛ゲうう。三匹とやあの。食ごうくと
墮脂ノ者ぞ。夫ありひ。犯でまうまる。香渡へ来ひて
四流ドまう「左掛ウエ謀ふ怖いゆと。手方ゲるの

と乳ゲ来ぞ。この物の変ふ有り所。ぞう親物い何
とゆ言ウエ「ハイ逃ぞ。ふ来ふ来ふ。
汁分仮をどうさう咬せ。モシ何ぞ。茶でも。呑と
来ぞと存ます「何来ぞ。ぞ左掛とお美。ぞレく
ぞとふ可毛さうふ「マア香渡四流ドまう「ナニぞと
ぞ処アイるのふ辛ぞョ。ぞうその子物の死骸を。何
処へ葬ひて来ておくとナ。若お寺へでも置るの
ぞう。宜ぞうあて呉かト小算貿あみて豊ぞう。

紙ヲ拵ヘて烏吉ヲかうこん「ナニそれハ私の方で出ハた
あるまいぞう「マア〳〵是で出て おくれ。僕まア吉様ハ見
こ日ヲ史ア。何ぞ面白しと遊ヒ来るのの。暗暮で
居ヲ出ようぞ。何ぞ拵ヒ給方いあるまいう「ヘイ私もその
ヲを稼く考へて居ますもの。サテよい思按ヒ出ません。
然し一ツ考ヘ張ヒ。ぞうまきうう一両日。ちくお気と居
て へバ考ヘます。何拵ヒ一ツ史いて見ませう「何平宅
ヲヲ不拵ヒ ヨト 聲へバ 世中の 旅人が。雷ヲあんな地しで。

稼ぎをそ居ヒめり。烏吉い件の物の子を。消壺を実
求め。収めて寺へ移て ちうんと。まる前へ来る 遣ヒ。見
雑めて 立ちまう「イヤ烏吉さん何を言るのぞ。今朝見
ちう 牝物 めが。子を産ぞ容子であつたが。史いその子
ぞ人ちのう「烏「ヲく こそ史ア物の子サ。ちく あぞ〳〵 金 死で
墮胎 さりの を形して おりまも。史不些 国孫 あるで。お
寺へ葬つて 遣ようとの人のぞ「バア そこハ 私ぞ。ちいのう
物の子 を。 へ葬 あるりのハ ちの。その 国孫 ちの 何拵ヒ 新ト

大江幸之丞
烏帽子引道を語る

此方は安く勝ふ商ひ。根岸を過ぎて「くくり」の方近曽
恥うしのゞ。不安くしてもの新ふ。隨分が出来ること不
世工「エ」でおのゞくく。絲金ばかりの多いあるう「ゝ」と思ひ
相ふ安くして。その隨分が死ぬのあんのと。イヤ嫌しの
やうだ。あの手処で一回や二回でいかうと。通つて新ゞ
服が勝とて。ハテ何振くくと一苦労。知つての通り主
新ふ。女房つゆ申ある身で居ゞう。左振りふるが智と
と日ふ。且那おを申不足尾ろう何でも隨服しく仕

まして舞が宜と。武蔵者坊ろう。隨服の凡菜。ろうこと粗莫つて
ゞ。呑菜い祝の身ふ。中ろくい人申りふ。若この菜で大多の女化。
祝ろくい且ろくい大変ゞ。何せ申紙してその上でと幸ひ赤の
牝物ゆゞ。孕んで居るろう振仮ふ雑て。食して新ヴコレ
この通ろう。服内の子いろふあるとしゞ。粗い格別悩と申ふ。見
ろい服して身粗ふ志ゆう。然くあゞろ満足で生まるうの
を菜を欲し。教しと罪の怖くさふ。お寺へ葬アとお所化化
牧んで。回向して来る積りサ。ろくくろ親活角征のこと

人ゆハ云てお呉あさるホ〳〵トいゝを吹「丈ぢゃア物も人間も。腹の工合ハ一ツ〻ホアト小首傾あけ居るうちホ。鳥吉い壺を縄ゆて結ア「ドレ〳〵早く行て来やうト肩ホ引うけゆてゆく。る途次を又送つて。偖い昨日の九茶を。倘もをもうと勧づるを。お耶麻グ呑ごといゝのい虚云。拘ホ咥あて試ちゆ。り遊莫ゐをゝ〳〵グ。密計洩まて後の邪魔。まづ右も左もこゆゐをお情さゆホお嘲しまうして。外ホ工丈を廻らうんと。夷へ強入らとこの次第。安しく

お情ホゆめごろり「中〻鳥吉といゝ和弟グ。一筋縄ごい金ね奴。何でも昨日の九茶を。怪しきものの計らひ。左様して又ゐまバ彼和弟グ。お耶麻さゆホいひ合ゆ。豊も油断いござらゐ。モウ手ごい性まゐ。サテ〳〵い吉方家で。攻劇療治と出うけませう「左様ア工丈ぢゃアゐ〻ごつさう。お耶麻い児女も同あごけまご。鳥吉グ彩推めゆ〻。何様うして。アノ男を。鄙へ帰ま工丈いゐへう〻「をまハあり〳〵竟ちゃつさい。むづうーうござりませう。

何でもそもよう形あのてい。まづ荒療治が早をまと

橋

そもそもこれる遠方の振まるのゞ「そ」荒療治とやしう。大

抵四推察がありそ示りの。そもそも夫形をごゝろまんと耳

ホロ傍せ低徘あり。彩て春へ出そうけり。早竟いろある

較計う。七く巻ホて精しくコろ記

嵯峨廼假寐巻之六終